

令和6年度 第1回学校運営協議会 記録

1 日時

令和6年5月23日(木) 10:00~11:30

2 場所

本校会議室

3 参加者

(1) 学校運営協議会委員 9名(うち1名欠席)

A 委員(学識経験者)

B 委員(教育関係有識者)…ご欠席

C 委員(福祉関係者)

D 委員(PTA関係者)

E 委員(企業関係者)

F 委員(地域関係者)

G 委員(福祉関係者)

H 委員(行政関係者)

校長(本校職員)

(2) 本校職員 9名(委員も含)

校長 副校長(小・中・高)、事務長、総括教務主任、学部主事(小・中・高)

*高等部は副主事が代理で出席

4 内容

(1) 開会のことば

(2) 校長あいさつ

皆様、本日はお忙しい中、令和6年度の学校運営協議会にご出席いただき感謝申し上げます。

昨年度は、コロナ禍の中のスタートで、3月末までは、「来年度はどうしようか」「感染症対策はどうしようか」「行事の在り方はどうしようか」など、色々考えながら、もやもやした気持ちで過ごしてきた。

4月以降は、自粛状況も解除されて、通常の状態でも新年度を迎えることができた。様々な計画がしっかりスタートし、大変よかったなどほっとしている。

本校は開校から6年目となったが、まだまだ学校としての形が大きくは定まっていない部分もある。よって、学校運営協議会の場で、様々ご意見をいただきながら、

進めて参りたい。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

(3) 委員、職員自己紹介

(4) 会長、副会長選出

会長：A 委員

会長に選任していただきました A でございます。会長として充分なことが出来るかわかりませんが、子供たちのためにできることを頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

副会長：G 委員

昨年度に引き続き副会長になりました G です。A 会長の補佐になれるよう、この会が前に進んでいくように、意見を出していきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

(5) 議事

ア 協議（進行：会長）

(ア) 令和 6 年度学校経営計画について

資料 p.3～5 のとおり承認

C 委員：達成指標について令和 4 年度と、令和 5 年度を比べると、ほとんどの項目において数値がアップしている。色々がんばりがわかった。全体の数値が上がったのは、それぞれ取り組んだ結果であると思ひますが、その原因に思ひ当たるところはあるか。

校長：コロナが 5 類に移行し、様々な制限が解除され、色々な活動が広がったというのが一つ目としてあると考える。各先生が、子供たちの興味や関心を引き出す活動がしやすくなった。今までは、コロナ感染への対応という中で、子供たちに色々な活動への意欲を我慢させていた状況もあった。現在でも、感染症対策については配慮事項として残ってはいるが、コロナ禍のような神経質にならずに色々な活動ができるようになったという変化は大きい。保護者に学校での活動を周知する機会も増えた。職員間で色々な活動へのアイディアが共有されるようになり、学校全体が活性化したということだと考えられる。

C 委員：先生方の意欲が高まって数値が上がったのはとてもよいことだ。指標があると職員は頑張る。しかし、ある一定のところまで上がるとなかなか数字が伸びないで苦勞するということがあると思ひます。そして数字を伸ばすために、

課題の端の方を頑張り過ぎて、本題の根本の方が変わっていないということが起きうる。頑張った割には、相手の満足が高まらなかったということがあ
ると思うが、先生方は本題のところを頑張った成果が現れたのだと考えられ
る。

F 委員：コロナは収まったが、コロナやインフルエンザを発症した場合、現在の
学校の対応はどうなっているのか？

校長：感染症の5類になったので、コロナはインフルエンザと同じ対応になっ
ている。発症してから5日間休んで、特に症状等が残っていないようであれば、
通常通り登校してクラスの活動に入ることができる。その後は状況に応じて、
咳が出る場合はマスクをしようなど周囲に配慮した対応になる。

F 委員：今は、（感染状況は）落ち着いていますか？

校長：本校の場合は、広がりが大きくないのでほっとしている。万が一、広が
りのスピードが早い場合は、学級閉鎖・学年閉鎖の対応になる。

C 委員：「いじめ」については、100%無いのが本来一番よいことで、みんなで
仲良くがよいのだが、感じ方や捉え方も人によって違うし、場合によっては、
いじめた側が「いじめられた」と思う場合もあると思うので、アンケートで
100%無しというのは難しいと思う。大事なものは、いじめが起きた場合の対処
のスピード感だと考える。学校の対応を教えてください。

校長：いじめが全くない、ゼロの状態を目指すのは理想であるが、学校は、人
間関係を学ぶ場でもあるので、集団の中で子供たちが生活を学び、力を付けて
いかなければならない。学校では、いじめには定義があるので、その定義を職
員がしっかり受け止めて、いじめがあるかないかということではなく、定義に
当てはまっていれば、いじめと認知し、対応のための会議をするなど、適正な
集団にしていくために、早期の対応をしていく。いじめをゼロにするために何
でもやっていくという対応で、かえって人間関係をぎすぎすさせないことも
大事である。人間関係を学びながら子供たちが成長する支援をしていく。子供
たちの様子を見て「これはいじめにあたるのだろうか」と思った場合に、
児童生徒の特性を考慮しすぎることなく、しっかりいじめとして認知し、適正
な対応を考え、望ましい人間関係作りに取り組んでいきたい。

職員にも、いじめかどうか迷ったらすぐに相談するように呼び掛けている。相

談を受けた場合は、いじめ対策組織でしっかり考えて、いじめかどうかを判断していく。職員が一人で抱え込まない雰囲気作りをしている。

A 委員：様々ご意見をいただきありがたい。

数字をどのようにみるか、どう扱うかは難しいところだ。100とか0とか、数字だけが目標ではないので、数字があらわしているものは何かをしっかりと見ていくことが大事である。

今回資料で示された数字は、保護者の指標が多いが、学校評価のアンケートを前期・後期と実施した結果については、PTA の会議など保護者と話し合う機会はあるのか。

校長：学校評価についてのみを取り上げて話し合う場はない。

A 委員：例えば PTA の役員会の際に、学校評価の結果について示し、保護者がどのようにこの数字を評価するのかは聞いた方がよい。

D 委員：学校評価のアンケート結果については、PTA 総会で説明はある。説明を受けた後、さらに PTA として踏み込むということは今まではない。

A 委員：役員会は集団が小さいので、意見を言いやすい雰囲気がある。学校批判云々ではなく、色々な観点からこの数字をどのように見るのかについて意見交換をすると、今後の取り組みに広がりが出る。今後、是非機会を作ってみてほしい。

(イ) 令和 6 年度地域連携について

別紙 A3 判の資料のとおり承認

H 委員：町内会の皆さんとの連携はあるか。

校長：どこまで連携が深まるかはこれから。現在の状況としては、公民館の清掃（高等部）、学校周辺地域のごみ拾い（中学部・高等部）、新山地区の夏祭り会場として駐車場を貸し出すなどのつながりがある。

C 委員：高等部の欄に記載のある地域のりんごを使ったパン作りは、とてもよい活動だ。ただパンを作るのではなく、「これが地域で作られているりんごだ

よ」とか、「だんだんりんごが育ってきているね」など、地域との関係を教えながら教育活動を行えるというのはとても良いことである。

A 委員：こういう図（資料中の図）で、各学部の活動を挙げてみて整理するのはとても大事なこと。我々にとってもとても見やすい資料である。どんな活動で地域と連携しているのかがよくわかってよい。大事なことは、教職員もこの地域との連携について情報共有していること。自分も経験があるが、同じ学校の職員でも、学部が違うとお互い何をしているのかわかりにくい場面がある。校外での学習を計画していくときに、小学部ではどのような経験をしてきたのか、それを踏まえて中学部ではどう重ねて、高等部へ送るのかという学習計画に、系統性や一貫性が失われがちなところがある。教職員がお互いの活動についてしっかり理解をした上で学習計画を進めていかなければ、校長先生も言っていた系統性や一貫性が出てこない。この表はとても見やすくよい。学校教育目標の達成に向けた経営の重点目標にもキャリア教育について記載があった。キャリア教育は地域連携と密接な関係にある。キャリア教育（地域連携）を進める際に、新たな活動を始めるのではなく、すでに行われている教育活動を見直すという視点で取り組むのが良い。地域連携とキャリア教育をバラバラに考えるのではない。学校での教育活動は、様々な要素が密接に関連して行われているのだという意識が、管理職はもちろん、教職員全体で理解し、教育計画を立てていってほしい。

最近、大変話題になっている教員の働き方改革について。教職調整額が4%から10%になったことなど、数字ばかりが話題になっているが、大事なことは仕事の中身の整理をすること。子供たちの学びの充実はしっかりとおさえた上で、業務の軽減や改善を図っていく意味では、色々な活動や行事があるのではなく、キャリア教育の視点からとか、地域連携の視点からとか、様々な視点があるのだということを、先生方が理解していれば、わざわざ新たに活動や行事を作らなくても、目標をクリアしていけるのではないか。いろいろなものを関連させながら教育活動を進めていただきたい。

D 委員：資料を見て、各学部の取り組みの内容が分かってよかった。内部の人間（PTA 関係者）としても、意外と詳しくはわからないことが多い。このような資料にまとめたものを見ると、かなり色々な活動をしていることが分かる。学校周辺の地区＝りんご、りんご園に関わったことを、高等部でも中学部でもかなりしているなという感想。このような活動内容について、もっとアピールしてもよいのではないか。学校の web サイトにも掲載されているが、新聞など、他の媒体でもよいと思う。最近、新聞に、久慈や前沢の例で、生徒た

ちで作ったものに関する報道があったように思う。県内の皆さんに「こういう活動をしているんだあ」と分かってもらえたと思う。ひがし支援学校も、手代森ならではのものとして有名なりんごを活かして、地域の人と一緒に活動し、加工品等を販売しているということをもっと訴えてよいと思う。ひがし支援学校はアピールが控えめな方だと思う。アピールをもっとしていけば、達成指標の「エ 学校が校報・ホームページ等を利用し地域に情報発信する取り組みを行っている」と答えた保護者の割合」のポイントも上がるのではないか。「ホームページ更新しました」のメールが保護者宛には送信されてくるが、これは内部の人間に対してのもの。これを外部の人にどうやって知ってもらうか。外部の人が、わざわざホームページを見に来てくれるわけではない。元々興味のある人は見に来てもらえるが、興味のない人にどうやってアピールするかが課題である。

A 委員：広報の時代なので、来てもらうのを待っているだけではなく、自分たちの方から発信していくことが大事だ。ホームページの充実をさらに図っていただければと思う。

- (ウ) 令和6年度学校運営協議会開催計画について
資料のとおり承認

イ 報告

- (ア) 令和5年度特別支援教育センター業務状況について
資料 p.7 のとおり承認

- (イ) 令和6年度行事予定について
別紙資料のとおり承認

- (ウ) その他

A 委員：来年4月の小学部新入生について、保護者向けの学校見学は随時受付か。日付の設定があるのか。

本校職員：個別の見学については随時受付で、学校見学の依頼はすでに来ている。来年度も入学のニーズが多数ある。今年度の「学校へ行こう週間」は7月8日から1週間を予定している。これも合わせると見学の件数はかなりの数にのぼると見込んでいる。

本校職員：昨年度は 80 名余りの来校があった。コロナ禍だったので、これでも少ない方だ。

A 委員：県内全体としては生徒数が減っているが、こちらの盛岡ひがし支援学校は、生徒数が増えていると聞いている。折に触れて校長先生から、教室不足等施設の面の課題について伺っている。

今年 2 月の県教育支援委員会で出た話題として、中学の特別支援学級を卒業した生徒たちが、特別支援学校の高等部ではなく、一般の高校へ進学するケースが増えているとのこと。これは岩手だけではなく、全国的な傾向である。配付資料によると、高等部の児童生徒数は 48 名とのこと。高等部の入学者数の増減について教えてほしい。

本校職員：高等部の入学数は横ばい。中学部から上がる生徒の数によって増減はある。

校長：ひと昔前に比べれば、特別支援学校の高等部ではなく、高等学校に進む生徒が増加していることは実感としてある。数年前までは、特別支援学校から一般就労を目指す生徒がいたが、年々減ってきている。将来的には就労を目指すとして、最初はむしろ福祉的就労につないだ方がよいのかなというケースが増えている。

A 委員：教室配置などいろいろと大変な課題もあるなかで、学部学年によって偏りが出てきても大変だろう。

C 委員：生徒の人数が増えているということで、先生の数も増えているとは思っていたが、配付資料に載っている教職員数を見て、新聞の人事異動の情報では分からなかった講師の先生の数多さを実感した。生徒の数が増えているので、先生の数も増えてはいるのだろうと思うが、教諭と講師の数のバランスという意味では十分足りているのか。

校長：教員の定数は、児童生徒数や学級数も関係している。県の基準にしたがって配置されている。子供の数が減ればそれに合わせて教員の定数が減ることになっている。

C 委員：障がい児施設では、虐待を受けて自らの暴力的行為があるなど、支援困難、あるいは支援課題の大きい児童が増えている。必然的に特別支援学校に

も同様の生徒が増えているということになる。教員の質の高さも大事だが、教員の数の確保も大事。講師の配置により数は確保されているかもしれないが、教諭の数をしっかり確保できるように教育委員会にもお願いしてほしい。

校長：講師は県全体で不足しており、必要な時にすぐどなたかに来てもらうのは難しい状況。本校では、教員の数は充足している。教育界全体としては、人材確保が大きな課題にもなっている。

A 委員：仕事柄、講師としてどなたか紹介してほしいという連絡はいただくが、本当にいなくて申し訳ない。他で聞いた事例で、講師が決まらない、担任も足りないので、4月から通常通りのクラス編成でのスタートが出来ず、5月の連休明けにようやく教員の数を確保しスタートしたというケースを聞いたことがある。こちらではどうか。

校長：本校は、副校長が1名増えて、3名になった。教員不足は本校には無い状態。ご安心いただきたい。

(6) 委員から

C 委員：お礼です。障がい児施設への入所は18歳までである。高等部の卒業生9名全員の進路を決定していただいたことについて、感謝したい。

D 委員：放課後等デイサービスなどの事業所職員の見学はできないか。事業所での様子とは違う面を見たい。「学校へ行こう週間」「ひがしの日」など、事業所職員の見学の機会を作してほしい。

E 委員：コンパクトで分かりやすい資料だった。しっかり理解できた。地域連携をどんどん進めてほしい。

F 委員：少子高齢化している自治会ではあるが、家族のつもりで学校へ協力していきたい。

G 委員：こちらも進路先の一つとして、いろいろお世話になっている。地域連携の状況が整理されていて感心した。地域の中で生活していく力を付けていく取組が分かった。良い環境で学びを深めてほしい。

H 委員：配付資料から、子供たちの成長を見守っていただきながら、先生方がいか

に努力しているのかがうかがえた。学校から出て、社会に出るという気持ちが大事である。学校に在籍している間は、生きていく力を蓄える期間。これを経て、障がい福祉サービスに結び付いていく。就労 A・B へ結び付く生徒もいる。障がい特性によっては受け入れてもらえないこともある。個人に合ったサービスに結び付けたい。

校長：ありがとうございます。いろいろな視点で意見を頂戴した。具体的に実行してみようと思うヒントをもらえた。

(7) 閉会のことば